

あとがき

BA1 結論

本書の結論としては「序章」中の「本書の研究の学術的意義」(BJ5) が該当する。ここに再掲することをしないので、改めてその部分に当たっていただければ幸いである。

BA2 謝辞1 (博士論文としての謝辞)

「ああ、国語学よ！日本人よ！」と叫んだところで目がさめた。博士号申請論文も完成間近のある夜のことである。時計を見ると「3:33」だった。

大学進学は、するのであれば、経済的理由から国立大学しか選択肢はなかった。外国語の勉強に興味があり、東京外国语大学に決めた。高校時代に第二外国语としてロシア語を選択して多少勉強したからという理由で、ロシア語学科を受けたが、思いはかなえられなかった。翌年、モンゴル語学科を受験して、晴れて大学生に。今にして思えば私の研究は、ロシア語学科でも、他のどの言語学科でもなく、モンゴル語学科に入学したからこそ始まったのである。

日本語に文法的性質のよく似た言語であるモンゴル語を学びつつあった私は、国語文法のあり方に疑問をいだくようになり、なんとか日本語を言語学的に扱うことはできないかと模索を始めた。やがて、音素を単位として扱うことができるローマ字を用いて形態素を正確に切り出すことによってのみそれが可能であることが分かった。国語学はひらがなを使い、拍を単位にして研究していたために、合理的な考察ができていなかつたのである。このことに気がついた。そしてさらに、切り出されたその形態素間に存在する関係の様態を立体モデルで表示することを考えついた。この方法で進めば、国語文法で理解できなかつた日本語の現象が理解できるようになり、自分を納得させることができるように

になる予感があった。ともかく、まず、自分だけは納得させることができる理論を構築すること、それが目的となった。

以後、その方法で進み始め、修士論文を書いた。しかし、正統的な研究の方法を否定するその方法、前人が試みたことのないその方法による研究は本当に研究として成立するのか、道は開けるのか、という漠然とした不安もあった。その後、実質9年ほどの海外での日本語教育従事の機会を得た。この期間はやり甲斐もあり充実していたが、それだけに研究の上では空白期間となった。こののち、杏林大学・外国語学部に奉職した。大学では、幸い、同僚や院生、学部生から精神的支援を与えられ、研究を再開し、発展させることができ、ここまで来ることができた。

研究が進むにつれ、国語文法、国語学がいかにひらがなの呪縛を受けてきたか、日本人がいかに伝統・権威にとらわれ、認識を狭く限定してきたか、という思いが強まった。島国である日本では研究も島国的になりがちである。島国は島の内部すべてが完結しがちである。だれかが完結しているように見える事態の不合理さに気付き、それを打破しなければならない。それができるのは「非正統的な」特異な存在者である。はからずも、その特異な存在者となった私は日々に上記の思いを強めている。

その思いが募って、冒頭の夜中の目覚めとなったのである。3時33分という3の揃った時刻は言うまでもなく偶然の時刻ではあるが、私のこれまでの研究の偶然性と同様に、あるいは何かこの研究を導くものが存在するのかもしれないということを思わせる偶然性だった。

そうかもしれない。この研究に関しては、私はただの媒体かもしれない。そんな思いも強い。ともあれ、とりあえずここまで来られた。同僚の方々をはじめ、森羅万象に感謝の気持ちでいっぱいである。

ありがとうございました。

BA3 謝辞2（『発展B』の謝辞）

博士論文を補訂して『日本語構造伝達文法・発展B』の形で出版するにあたり、改めて感謝したい方々がいる。

日本語にも博識である英語教育学の谷口賢一郎先生は、私が「嗚呼玉杯に花うけて」の「うけて」は漢字で書けば「浮けて」ではないかと、お考えを伺ったところ、これに関する貴重な資料（後藤・渡部 1993）を探し出してくださった。これはB9.2②に反映させていただいた。

中国文学の詹満江先生は、私の思いつきで、ある原動詞が古代中国語と関係がある可能性につき仮説を立てて伺ったところ、現段階では実証できない旨を丁寧にご教示くださいました。

すでに「まえがき」でもお名前を出させていただいたが、日本語学（語彙論）の玉村禎郎先生は、拙論の主要部を丁寧にお聞きくださいり、いろいろコメントをくださって拙論が国語学的な観点からも妥当なものであろうということを示唆してくださいました。

そして、特に今回の出版では、中国政治専攻の小山三郎先生にお世話になりました。『日本語構造伝達文法』はこれまでまったくの自費出版で流通に乗ることがなかったことを気にかけてくださり、晃洋書房にご紹介くださいたほか、多くのアドバイスにより、流通に乗る出版を実現させてくださいました。

このほかの同僚の方々にもさまざまな形でお世話になった。大学院・学部の私の授業において、質問をしたり考え方を示したりして私を奮い立たせてくださいた学生の皆さんにも感謝したい。

また、杏林大学大学院国際協力研究科より出版助成を賜ったことも、ここに記して感謝申しあげる。

最後に、図・表の多い、扱いにくい原稿をこのような立派な形に仕上げてくださった晃洋書房の上田芳樹社長、編集ご担当の高砂年樹氏、藤原伊堂氏にも心より感謝を申しあげたいと思う。

皆様に、本当にお世話になりました。ありがとうございました。
(まだまだ考察の行き届かないところがありますので、今後ともよろしくお願ひいたします。)

2009年の夏

今泉 喜一

